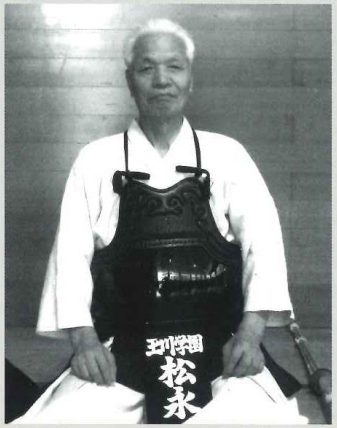
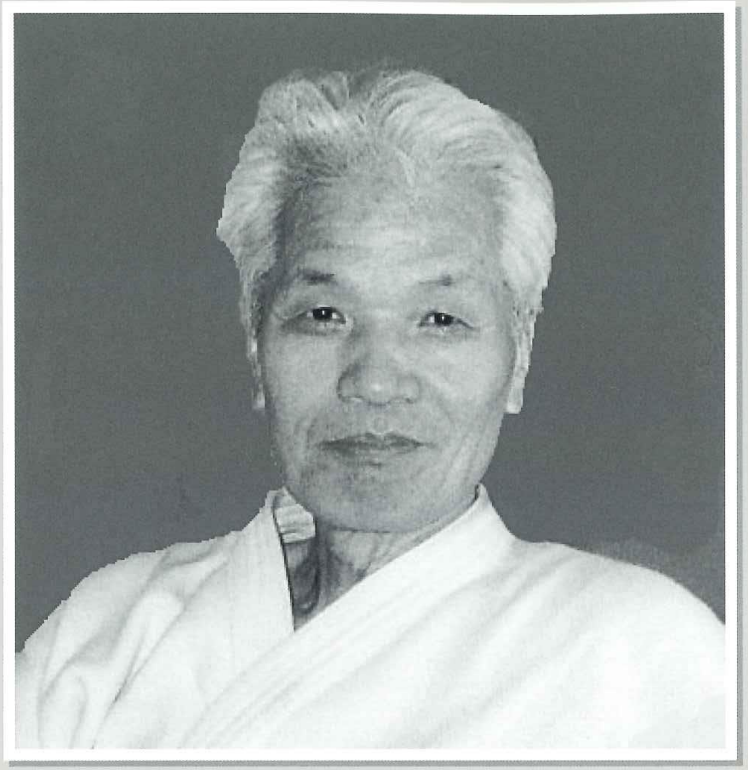
玉川大学剣道部
師乃会

Memorial Masami Matsunaga

松永政美先生を偲ぶ



井上正孝師範追悼稽古会（2004年７月）



松永政美の足跡　剣道家として　教育者として

樋口秋夫

松永政美先生が逝き、はや１年を迎えようとしている。いま、その88年にわたる歩みを辿れば、剣道界におおきな足跡を残していることに気づかされる。また、その人望についてあらためて知ることも多い。われわれ玉川大学剣道部OB・OGにとっては、どの年代においても、あまりにも身近な存在であったがゆえ、全体像が見えていなかったのかも知れない。

小文は、こんな松永先生の足跡を記録としてとどめ、後輩たちにも語り伝えたいというおもいが発端となっている。そんな意味で小伝的な構成をとっているが、歴史的・風土的な背景、人生の岐路となる人物との出会いは、先生を知るうえで重要な手がかりと考えた。

なお、先生の表記について、青年時代までは「名前」を用いている。また、文中の敬称は省略させていただいた。

■八幡の風土と時代

1933（昭和８）年４月１日、松永政美は福岡県八幡市（現北九州市八幡東区）で松永家六男一女の四男として生を受けた。父親は佐賀出身で、当時製鉄所に勤務していたという。

八幡市は1901（明治34）年に官営八幡製鉄所が設置され、北九州工業地帯の中核として順調に発展をつづけていた「鉄の都」であった。また市の資料をひけば「比較的温暖である」というように穏やかで暖かな過ごしやすい土地である。

政美はこの地で少年から青年時代をすごした。日本が日中戦争から太平洋戦争へと突入し、敗戦とともに連合国総司令部（ＧＨＱ）の占領下におかれた時期とかさなる。少年時代、国内では戦時体制が進行し、小学校が国民学校となる。八幡は戦略的な攻撃目標として米軍B-29の空爆にさらされた。学童は、東京など大都市同様に疎開した。1945年８月８日、八幡は大規模な空襲をうけ壊滅的な被害を被った。ほどなく8月15日を迎える。政美は後年、「あの虚脱感が忘れられない」とこの日を回顧している。少年にとっては忘れることの出来ない一日となった。

翌年、戸畑中学に進学する。旧制から新制への移行期であった。学校では武道（剣道、柔道、薙刀、弓道）が一切禁止となった。そのかわりでもあるまいが、川遊びを楽しんでいたという。

1949（昭和24）年、政美は八幡高校に入学し、製鉄所ではたらきながら勉学に励んでいた。学校生活では音楽と相撲に興じていたという。この時期、地域ではかろうじて稽古ができた。武専出身の佐伯太郎もそのひとりで、八幡製鉄所で職を得ながら師範をつとめていた。政美とはここで知り合い、のちに親交を深める。「しない競技」が考案されたのもこの頃であった。1952（昭和27）年、対日講和条約が発効し占領は終わりを告げる。「全日本剣道連盟」が発足し復活への基盤も整ってきた。1953（昭和28）年３月に政美は高校を卒業する。将来に思いをめぐらす多感な青年期である。「鉄の都」で安住か、新たな可能性に挑戦するか悩んだ。しばらくおいて、政美は新聞で知った皇宮護衛官採用試験を受験する。国家公務員の身分、努力次第で道が拓ける世界は魅力的と映った。合格者は九州地区で２名という難関であった。

■皇宮から警大へ

1955（昭和30）年４月、松永は皇宮警察本部（以下皇宮）に入庁する。剣道と本格的に向かい合うのはこの時期からといえる。道場「済寧館」は1883（明治16）年に明治天皇の命により建設され、皇居内現在地に新築されたのは1933（昭和８）年である。ここで剣道師範の佐藤貞雄（1904－1985）と出会う。佐藤は高野佐三郎門下、土田武司、中倉清ともに皇宮の一時代を築いた剣士である。体躯小柄ながら肩幅ひろく、鋭い眼光と相まって存在感を放っていた。この佐藤が松永を全人格をもって育てたのである。稽古はときに突き倒すような激しさもあったが、「マツ」「まっちゃん」と呼び可愛がった。松永の人間的な資質を見抜いていたかのようだ。松永もこれに応え、剣道専修員（特錬）となる。立番免除という特典も魅力であったらしい。選手は現在、過去の実績による採用枠もあるが、この時代はゆったりとしたものであった。「六尺豊かな」身長を生かし上段をとったのもこの頃である。専修員には阿部嵩、辻村祥典、佐野昭三らがいた。なおこの間に法政大学法学部に入学、1962（昭和37）年に卒業をしている。やがて松永は主将に指名される。皇宮は規模が小さく選手層は薄い。それでも上位の常連として警視庁、大阪府警などと互して戦っていた。1964（昭和39）年の全国警察大会では、大将として出場し優勝（B組）を果たしている。選手は後藤清光、加藤浩二など経験者が加わり厚みがましていた。

1963年４月、30歳で結婚をする。新婦恭子は井上正孝（1907－2003）の長女で、２歳半年下である。井上の剣友江上五郎の仲立ちであった。井上は東京高師出身の剣道家。当時大阪修道館長、のちに東海大学教授、玉川大学師範を歴任する。式は弥生会館（現在日本武道館が建っている）で挙行された。松永にとっては、家庭を築くことの安定にくわえ、教育剣道の世界が出現した。松永の剣道理論は井上の影響抜きに語れない。結婚後、松永は自宅に友人を呼び酒席を設けることを好んだが、そこには恭子夫人の献身的な協力もあったという。

選手生活を終えると、佐土原勇、中村伊三郎の下で後進の育成にあたることになる。済寧館には、レスリング協会の八田一郎、作家の三島由紀夫など著名人が来訪することもあった。松永は立場上関わらざるをえなかったが、多様な世界を知り視野を広げる機会にもなった。

おおきな転機が訪れた。1976（昭和51）年、警察大学校（以下警大）術科教養部教授に推薦されたのである。ステップ・アップであった。術科教養部は全国警察の剣道指導者養成を主とし、警察剣道の理念、目的を共有する使命もになっていた。学生は全日本選手権や全国警察大会で活躍した精鋭も多く、この集団に半年間で幹部指導者にふさわしい技術と教養を修得させることを目的としている。松永は稽古ばかりでなく、放課後にも学生たちとよく交流を図り、ときに得意の歌も披露していたという。伊保清次、岡憲次郎など蒼々たる教授陣もいた。また、全日本剣道連盟（以下全剣連）広報委員として全日本選手権のテレビ解説も担当していた。1981（昭和56）年4月には主任教授となり、同年5月に京都で8段を取得する。この時期、「剣道理念と教育的効果」（『警察学論』34巻、警察大学校、1981年）という論文を発表し、「剣道が人間形成のために正しく発展するよう本質を誤らない努力をせねばならないと思っている」と結んでいる。

全剣連での活動も多くなってくる。固定観念にこだわらない柔軟性、出身母体の利益代弁者とならない公平性も評価されたとおもわれる。試合審判規則委員会委員長、常任理事など要職に就任したのもそれゆえである。同様に、海外での指導や講習会にも多く駆り出されている。派遣国では、その明るい性格や英語力もあいまって、外国人剣道家たちと交流を深めていたという。こんな実績はのちの国際委員会委員長、国際剣道連盟の副会長就任にもつながってくる。

1991（平成３）年5月には範士、同年10月に術科教養部長となる。この職位に技官系剣道専門家が就くのは意味あることで、警大における松永の存在感を示す証左であった。

松永は1993（平成５）年３月に定年を迎え退官する。後継は皇宮出身で気心の知れた後藤清光がつづいた。

定年後は伊勢原に転居し井上正孝一家と暮らすことになる。井上とは剣道の話ばかりしていたという。犬も家族に加わった。

■玉川とのきずな　歌声に迎えられ

玉川学園創立者 小原國芳と

話は前後する。松永と玉川学園・玉川大学の歴史を語るには、その発端からはじめなければならない。1965（昭和40）年、高等部で「学校剣道」が採用され、皇宮名誉師範の佐藤貞雄が招聘された。これを機に佐藤は創部まもない大学剣道部師範に就任するなど、学園全体で剣道に対する気運が高まってきた。松永とはそんな一環として関係ができたのである。学内合同稽古会や地元剣連との交流がはじまり、こんなとき松永は要請に快く応じて駆けつけてくれた。佐藤が松永を呼んだのは、「勝負」だけでなく「教育」という場での経験を通し、指導者としての大成するため視野を広げてほしいという親心でもあった。

松永は、はじめて学園に来たときの印象を語っている。生徒たちが「うれしや　われらここにあたらしき友（先生）迎え」ではじまる「歓迎の歌」（岡本敏明作詞・アメリカ民謡）など歌声でで大歓迎してくれたという。知らない世界であった。松永もこの学園を気に入った。

こうして大学の合宿や行事、寒稽古などに参加するようなり、1967（昭和42）年の台湾遠征にも同行している。学生たちには親しみやすい兄貴分といった存在でもあった。稽古も力で圧倒するような剣道ではなく、相手の技を引き出すような使い方をした。助言をするときもいたずらに欠点を指摘するより長所をほめることが多かった。この気さくな性格や偉ぶらない態度は8段になっても範士になっても終始変わらなかった。同様の評価は外部でもよく聞く。

やがて、松永は警大にうつり、全剣連でも要職をになう。それでも剣道部の新歓や送別会にはよく参加し、興にのるとシャンソン「聞かせてよ愛のことばを」を仏語（奥付頁参照）で披露したりし、学生たちをよろこばせていた。学生の合唱でベートーベン「第９交響曲」の合唱部分を聞くのも好きだった。こんな学生とのきずなは卒業後もつづき、結婚式などに招待されると近くでも遠くでもほとんど出席していた。

合宿には中高・大学と毎年参加していた。松永がとりわけ思い出とするのが1984（昭和59）年の大学の夏合宿である。和歌山県高野山で開催された合宿は、佐藤貞雄と井上正孝の両範士が揃って参加するという「特別」なものになった。井上は２年前から玉川に迎えられていた。松永は、「佐藤、井上両師範が揃っての合宿は楽しくもあり、日々、講話や剣道史なども豊かな経験を生かして学生達に語り、合宿の苦労を凌駕して活力になったと確信しております。」と、『玉川大学剣道部50年史』に記している。

警大の定年退官を翌年に控えた1992（平成４）年12月、松永は新宿で学園の使者と面会をしていた。そこで、「ぜひ玉川にお招きしたい」という総長小原哲朗（当時）のことばを伝えられた。かくして松永は1993（平成5）年4月から玉川大学学術研究所教授、玉川学園剣道師範（常勤）となった。剣道界における実績と人望が高く評価されたといえる。玉川では教育による人間の価値実現と剣道という課題を探究していた。一般学生向けに内外から講師を招く「全人教育」という特別教養講座があり、「武士道」について講話をした記録も残っている。また全剣連規則の改正見直し作業にも取り組むことなる。なお、研究所時代には、東京農工大学の百鬼史訓らと共同研究で「剣道場の残響音に関する研究」、「剣道具（面）の安全性に関する研究」など、日本武道学会「武道学研究」に論考を寄せている。

研究所教授は1999年（平成11）年３月までで、以後2009（平成21）年３月までは客員教授、その後も師範として学生たちと共にあった。また、大学剣道部OB・OG会「師乃会」立ち上げのきっかけを作るなど、大所高所に立った提言や助言も忘れなかった。

この後も活躍はつづく。剣道界は松永をなお必要としていた。2009（平成21）年の秋には全剣連副会長と国際剣道連盟（IKF）副会長に就任し、会長を助け実務をになうと同時に責任も負っていた。いそがしい中にも玉川に来ることは何よりの楽しみであったという。

そんな松永であったが、2021（令和３）年の６月に体調を崩し入院がつづく。一時期小康をえていたが、同年8月29日夜、体調が急変し伊勢原協同病院で88年の生涯を終える。死因は多臓器不全であった。コロナ禍ということもあり、葬儀は親族で営まれた。また、剣道界における永年の功績により正六位に叙せられ、瑞宝小綬章を授けられ伝達された。

いまは自宅からほど近い「鶴巻霊園もえぎのさと」に眠る。

■松永政美がめざしたもの

剣道家として最大の功績は、「試合審判規則」（1995年7月施行）、「段位称号規則」（2000年

４月施行）の抜本的な見直しに尽力したことをあげたい。この規則は剣道界の根幹をなす双璧で、その適否が剣道人におおきな影響を与えるものであった。そんな中で、試合至上主義の弊害や段位制度の矛盾などが指摘されるようになり、制度の見直しは年来の課題となっていた。これに対しては全剣連でも何度かの改正をしてきた。しかし本質をふまえた議論は少なく、問題が先送りとなっていたともいえる。

松永が主導した改正を端的にいえば以下の通りである。試合については、「剣の理法」ということばをいれ、目的と手段を明確にしたことである、段位称号については、段と称号（錬士・教士・範士）それぞれの位置づけを明確にしたうえで一元化し、段位の上限を８段にしたことである。これにより、あり方が示され、社会からみてもわかりやすい制度となった。しかし成案までの道のりは平坦なものでなかった。とりわけ段位を８段までとしたことは、直接的な利害も絡み異論もあったという。この難しい役割を引き受けまとめ上げることができたのは、松永の手腕に負うところがおおきい。そこには、剣道の本質をふまえ、将来につながる正しいあり方を示したいという信念と決意があった。

教育者としての松永は玉川での実践につきる。教育による人間の価値実現に、剣道を位置づけようとしていた。まさに「活人剣」であり、「教育剣道」であった。

松永政美の88年にわたる足跡を辿り終えたいま、われわれはその生涯を俯瞰できる場所に立っている。そこでは剣道家として、また教育者としての姿が見えてくる。それが松永の人格として一体のものであることに魅力を感じる由縁がある。

われわれは、こんな松永政美を師範にもったことをあらためて誇りにおもう次第である。

この小文をまとめるにあたり、取材協力、資料提供をいただいた各位に心からお礼のことばを申しあげたい。また、内容の誤謬、遺漏についてはご教示いただければ幸いである。

（樋口秋夫　剣道部６期、第５代監督）

【参考文献】
『30年史』全日本剣道連盟、1982年　『剣道の歴史』全日本剣道連盟、2003年
『50年史』全日本剣道連盟、2003年　『皇宮警察史』皇宮警察史編さん委員会、2006年

松永政美 年譜　1933⇒2021

年代		主な経歴
1933(昭和８)年		４月１日、福岡県八幡市（現北九州市八幡東区）に生まれる
1953(昭和28)年	19歳	３月、福岡県立八幡高等学校卒業
1955(昭和30)年	22歳	４月、皇宮警察本部入庁
1958(昭和33)年	25歳	４月、法政大学法学部入学
1962(昭和37)年	29歳	３月、法政大学法学部卒業
1963(昭和38)年	30歳	４月、井上恭子と結婚
1968(昭和43)年	35歳	９月、長男晃一誕生
1974(昭和49)年	40歳	３月、北欧・欧州巡回指導及第1回欧州選手権大会参加
1976(昭和51)年	43歳	４月、警察大学校術科教養部教授に就任
1977(昭和52)年	44歳	４月、西欧歴訪使節団及第２回欧州選手権大会参加
1978(昭和53)年	45歳	４月、玉川学園非常勤講師（1988年３月まで）
		竹中工務店剣道部師範（2021年８月29日まで）
1981(昭和56)年	48歳	５月、剣道八段に昇段
1982(昭和57)年	49歳	10月、アメリカ・メキシコ巡回指導
1988(昭和63)年	55歳	４月、玉川学園剣道師範＊非常勤（1993年３月まで）
1989(平成元)年	56歳	６月、全剣連常任理事（2005年６月まで）
		試合審判規則委員会委員長（1990年３月、1993年４月-1995年３月まで）
1991(平成３)年	58歳	４月、剣道演武派遣（カタール、オマーン、アブダビ）
		４月、国際委員会委員長（1993年３月まで）
		５月、剣道範士号を授称
1993(平成５)年	59歳	３月、警察大学校定年退官（術科教養部長）
	60歳	４月、玉川大学学術研究所教授に就任（1999年３月まで）師範兼務
1997(平成９)年	64歳	４月、称号段位委員会委員長（2003年３月まで）
1999(平成11)年	66歳	４月、玉川大学学術研究所特別研究員（2009年３月まで）
		玉川学園剣道師範＊非常勤(2021年８月29日まで)
		新日鉄剣道部師範（2011年３月まで）
2009(平成21)年	76歳	８月、世界選手権大会（ブラジル）審判長／国際剣連副会長（2018年まで）
		全剣連副会長（2017年６月まで、2021年８月まで相談役）
2010(平成22)年	77歳	１月、剣道演武派遣（ポルトガル、スペイン）
2013(平成25)年	80歳	１月、日本武道協議会より平成24年度武道功労者として表彰
2016(平成28)年	83歳	11月、全剣連より剣道功労賞を受賞
2021(令和３)年	88歳	８月29日、逝去／正６位に叙せられ、瑞宝小綬章を受章